

限界集落問題とは何か

—限界集落が抱える問題と、その難しさを探る— (要旨)

「限界集落」という言葉は、もともとは大野晃が使った集落分析のための用語であったが、今やその詳細はともかく言葉自体は広く知られるようになった。また、大野が定義したような限界集落が増加していることも事実である。集落がなくなる恐れがあることを知り、漠然とした危機感を抱き、集落の人口を増やす取組を考える人も多いかもしれない。しかし、限界集落問題は、そうした取り組みを行って解決するものではないと筆者は考える。なぜなら、これから日本全体として人口減少や高齢化が進んでいくため、集落の人口を増やしたり、若者を呼び込んだりすることは非現実的であるからだ。それよりも、人口減少や高齢化が進むこれからの日本で、限界集落とどう向き合っていくかを考えなければならないのである。

本論では、限界集落という用語を生み出した人物である大野の議論と、それを踏まえ独自の視点で限界集落問題について言及している3人の論者の議論を取り上げる。まず、大野は、人が住まなければその土地は荒廃する、という考え方の下、山地や農地を守るためにも限界集落の人々の生活を守るべきだ、という主張をしている。限界集落を定義したのも、中山間地域、ひいては国土全体の荒廃に対する警鐘を鳴らす目的がある。これを受け、山下祐介は、現在の限界集落の暮らしには問題はないとし、少子化による集落の担い手不足の問題を指摘している。小田切徳美は、限界集落問題が起こる過程では、土地や人の空洞化、誇りの空洞化が起こっているため、そうした空洞化を防ぐためには、集落の外の人々が、その集落に目配りすることが重要だとし、限界集落問題は一国全体の問題だと述べている。畑本裕介は、限界集落においては、地域の振興を目指すよりも地域福祉に力を入れるべきだと主張している。4人の視点は異なるものの、限界集落問題を多角的に捉える上で、どれも注目すべき見解である。本論では、これらの先行研究を整理し、その意義を評価する。

また、本論の後半では、「積極的な撤退」という考え方を取り上げる。大野を含む4人の論者が集落移転について触れていないように、集落移転に対しては否定的な意見が多い。しかし、積極的な撤退という考え方では集落移転を肯定的に捉えている。それは、集落移転をすることで住民の生活が改善されること、移転した後の集落のあった土地もひたすらに荒廃していかないように管理を工夫すること、という2点を踏まえている。集落移転を実現するためには、金銭的な問題や住民の合意形成の問題などが伴うことも確かである。しかし、集落移転を前向きな選択肢として捉えていること、集落移転は行政のためだけではなく住民のためになることを主張しており、積極的な撤退は重要な視点だと言える。

以上を踏まえ、限界集落問題とは、住民の生活の問題であると筆者は考える。ゆえに、住民・行政・その他の人々など、どの立場も尊重できるような、妥協案を模索しなければならない。そして、限られた方法にこだわらず、様々な方法を試し、その集落にあった将来のあり方、住民の生活の仕方を見つけていくことが求められる。